

キヨ子子の憂鬱

オーバーうらら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キヨンが朝目覚めると、あろうことか身体が女体化していた。

無論、犯人はわかっている。あの女の仕業だろう。

キヨンは他のSOS団メンバーとともに、元の姿に戻るために奮闘するが……

目次

第1話	何か、おかしい	1
第2話	女子高生生活の始まり	4
第3話	野球大会	9

第1話 何か、おかしい

世界がまるで悪魔に支配されたが如くに黒々とした梅雨雲へと覆われ、人々の心を暗澹たる気分にした6月。

じれったい梅雨前線を前に、俺も多分に漏れず暗澹たる気分には包まれていたわけであるが、そんな気分をさらに倍加させる事態が起こった。

その日の目覚めも雨にも負けず風にも負けず颯爽と俺の安眠を奪いにやってきた妹の一声だった。

ただ、その一声がおかしかったのだ。

「キヨンちゃん。おーきてー」

「んん……」

重たい瞼をなんとか強引に開けつつ、重い頭を持ち上げる。そして、改めて先ほどの一声を思い出す。

なに、キヨンちゃんだと？

「我が妹よ、さつき俺のことをななんと呼んだ？」

「えく？ だから、キヨンちゃんって呼んだだけだよ」

なんとということだろうか。我が妹は、兄たる俺を「くん付」で呼ぶことに飽き足らずついに「ちゃん付」で呼び始めたようである。まったく、やれやれだぜ。

そんな兄の悲痛な表情も妹には伝わらなかつたようで、妹は早くご飯を食べるように急かす一言を付け足すとすたすたと三味線連れ去って行ってしまった。

「それにしても、今日はやけに頭が重いな」

そう。なんだか平生に比べて妙に頭が重いのである。

その思いから、ふと頭に手をやる。

「な、なんだこれは！」

驚くのも無理はない。なんと、俺の髪の毛の量が昨夜に比べて倍以上に伸びていたのだ。

これはなんだ？ 誰の差し金なんだ……。

——また、あいつか。

と、朝方の二重の意味で重い頭をぐるぐると回しつつそうやって自問自答していると、脇に無造作に置いてあった携帯がせわしく鳴り響いた。

携帯電話の画面に映し出される発信者名を見ずとも誰からの電話であるかは一目瞭然である。

「おはようございます、僕です」

この憎たらしいまでのイケメンボイスで挨拶をしてくる輩は古泉一樹。俺が所属するSOS団副団長にして、なんと不思議なパワーを操る超能力者である。

「おい、古泉。これは一体なんだ？俺の髪の毛が滅茶苦茶なことになってる。よもや、髪の毛強制植毛ウイルスでも蔓延してるんじゃないかな」

「おや、もう事態を把握していらっしやるのですか？素晴らしい順応力ですね」

「そういったお世辞は聞き飽きた。はやく状況を説明しろ」

「ええ、しかし、状況は非常に簡単だと思われますよ」

「簡単？まあ、髪が伸びているだけだからなあ」

俺の何気ないその一言に、何故か古泉は暫し沈黙した。

「いったいどうしたのだろうか。」

不思議に思った俺が返答を急かすと、古泉は大変申し上げにくいのですが、と前置きしながら言葉を紡ぐ。

「もしかして、この事態にまだ気づいていらっしやらないのでしょうか？」

その言葉に、俺は一瞬固まる。

「気づいていない？ Why 何故？」

「だから、髪の毛が異常なまでに伸びているという話だろうか」

すると、古泉は若干困ったような口調で、

「では、そのまま鏡でご自身の状態を確認なさってはいかがでしょうか。さすれば、事態を簡単に把握できることでしょう」

その勿体ぶった言い方は非常に癪だったが、ひとまず事態を把握することが先決だ。

俺は急いで階段を駆け下り洗面台にある鏡の前に立ち、そして、驚愕の表情を浮かべる。

「誰だ、これは……」

そこには、俺ではない性別も全く異なる長髪の女子の姿がうつつていた。

第2話 女子高生生活の始まり

「なんだこれは……!」

鏡に映るのは、俺とは似ても似つかない少女だった。

顔はまあそこまで悪く無い部類ではなからうか。若干胸のあたりが寂しいが。

驚愕のあまり言葉を出せずにいると、脇の方から俺を呼ぶ声が聞こえる。

ああ、通話中のままだったな。

「いかがでしたか？ 女性になられた気分は」

「全くもって不愉快だ。勝手に身体を変えられたんだぜ」

「んふっ。そうですね」

顔面蒼白な俺を尻目に、古泉は電話の向こうで平生のニヤケ面を浮かべているようだった。あとで会った時に殴ってやるか。

「ところで、俺はどうすればいい?」

「そのまま登校していただくしかありませんね」

あっけらかんという奴だ。

俺が何も言えずにいると、古泉は「それでは、お会いするのを楽しみにしておきますね」とだけ告げ、電話を切った。

恐る恐る俺の部屋をチェックすると、そこには北高の女ものの制服が掛けられていた。

おい、本気と書いてマジでこの姿で学校へ行くのか。勘弁してくれよ。



起きたら女体化という奇天烈体験をしただけでも憂鬱な気分になるのだが、そんな俺にさらに追い打ちをかけるかの如く目の前には早朝ハイキングコースが待っている現実があり、暗澹たる気分が倍加した。

男の時でもこの学校へと続く道のはいささかしんどいものであったわけだが、今日は身体が女子になってしまっているからかいつもに増してキツイ。

そのせいで、登校時間ギリギリに教室に到着する羽目になってしまった。

「おっす」

俺の後ろの席には、いつもの通り我がSOS団の何物にも侵すべからざる団長である涼宮ハルヒが口をアヒルのようにして遅いといわんばかりの表情で座っていた。

くそう、誰のせいでこうなっていると思っっているんだ。

その後はと言うと、平生と変わった様子もなく滞りなく授業は終了し、放課後となった。

変わったところはと言うと、授業中にハルヒが俺の髪の毛をいじつてもてあそぶくらいだろうか。

実に鬱陶しいったらありやしないぜ。

ちなみに、髪型はポニーテールである。これは、単純に簡単にできる髪型であるからそうしたわけであって断じて他意はない。

「あたしは今日、掃除当番だからアンタは先に部室に行っておきなさい」

ハルヒのその言葉に従い、俺は足早に部室のある部活棟へと向かった。

この状況において、この言葉は好都合だ。

なんとしても聞いておきたいことがある奴がいるからな。

部室の前まで来ると、いつもの如くノックをして入室する。

「おや、ようやくいらっしやいましたか」

一番最初に反応したのは古泉だ。

「わあ、本当に女の子になっちゃったんですねえ」

次に、朝比奈さんが俺の顔を見るなり近づいてきて抱きついてきた。

近い近い。なにか柔らかいものがあたっていますよ。

「……」

ちなみに、長門はと言うと平生の通り無言でのお出迎えだ。こういう時に、その無反応さは非常にありがたい。

それにしても、だ。

俺はどうしてこんな姿になっているんだ？ どうせ犯人は解っている。

——ハルヒだ。

「恐らく、その通りでしょう。問題はその理由ですよ。なにか心当たりはないのですか？」

俺の呟きに、古泉が嬉々として答える。

なんだコイツ。自分は何ともないからっていい気になりやがって。

「そうだな。特にないな」

「そう言われると、困りましたね。こちらとしても、心当たりがないんです」

「私もですう……」

どうやら、古泉や朝比奈さんにも当てがなかったようで、事態は一向に進展する気配がない。

こういう時は、あいつに聞くのが早いか。

「長門、お前はこの原因を知っているか？」

「……知っている」

流石困った時の長門さんだ。頼りになるぜ。

んで、原因は何なんだ？

「涼宮ハルヒは同性の友人が欲しいと願った。だから、貴方は女体化した」

なるほど。解らん。

俺が呆然と立ち尽くしていると、横で微笑を浮かべながら聞いていた古泉が納得したように頷いた。

「なるほど。つまり、こういうことですか？ 涼宮さんは、何らかの原

因によって、同性の友人が欲しいと思った。そこで、今現在一番親しい人物である彼を女性化し解決した」

「……だいたいあつてる」

おいおい、待て。そんなくだらんことで、俺が女体化したというのかよ。

あいつは本当に突拍子もないことをやらかすもんだ。

それに、だ。同性の仲間なら、長門や朝比奈さんがいるじゃないか。

わざわざ男の俺を女体化させる必要なんて全くないと思うがな。

「……朝比奈みくるは、明確には先輩であり友人には該当しない。また、私では彼女の想像する友人関係になりえないと判断されたものと推測される」

お、おう……。

それで、俺が同性の友人として選ばれたって訳か。

俺は恐る恐る疑問をぶちまける。まあ、ある程度予想はつくのだが。

「じゃあ、結局俺が元に戻るためにはどうすればいいんだ？」

「……同性の友人関係を体験させて満足させ、なおかつあなたが男性の方が良いと涼宮ハルヒに感じさせる必要がある」

「やっぱりか」

◆◆

「待たせたわね！」

誰も待つてなどいないのだが、という俺のせめてもの反論は当然の如く無視され、この絶対的存在たるハルヒ団長閣下は堂々たる様相で部室へと入ってきた。

そして、その両手にはいつか見たような紙袋が握られていた。

「ひいっ」

その紙袋を見た途端、いつぞやのトラウマを再発させたのだろうか、朝比奈さんが小さく身震いさせるのが垣間見えた。

「おい、ハルヒ。また、朝比奈さんに変な服装をさせる気か？ もうそろそろいい加減に——」

俺がいつもの如く、俺が朝比奈さんへの強制的着せ替えを批判しようとしていると、ハルヒははあ？ とさも馬鹿を見るような表情を浮かべ、

「何言ってるの？ これは、あんたの服よ」

あっけらかんと聞き捨てならないことを言いやがった。

え、マジですか？

「おい、待て。俺は頑としてそんな服は着ないぞ。俺は男だ」

「はあ？ どこが男なのよ。バツかねえ。ほら、早く脱いだ脱いだっ

！」

「うわっ」

まるで幼女を狙う変態のような表情を浮かべたハルヒに強制的に脱がされそうになる俺。

すかさず、他のSOS団メンバーに助けってくれとアイコンタクトを送る。

「キョンくん、これも戻るためです。頑張ってくださいあい！」

「……頑張って」

とまあ、全く力になってくれないようである。

おまけに、古泉なんてどこから取り出したのか一眼レフカメラを構えている。

おい、お前はさっさと出ていきやがれ。

数分後、俺は赤色のチャイナドレスを着せられていた。

「うん、あたしの目に狂いはなかったわ！ 完璧よっ」

「ふええ、とつても可愛いですよ」

「……素敵」

「お似合いですよ。今度、デートに行きませんか？」

とまあ、SOS団メンバーは様々な感想を漏らしている。

古泉、本当にお前殴るぞ。

かなり恥ずかしいせいか、赤面してしまう俺に、ハルヒはさらに上機嫌になって言う。

「明日は、何の服にしましょうか！ みくるちゃん、古泉君、なにか案はない!?!」

「ふええ、なんでも似合うと思いますっ」

「警官の制服なんてどうでしょう。彼女の警官姿を想像するだけで胸がドキドキしますよ」

もういやだ。帰りたい！

これから、毎日こんな思いをして学生生活を送らねばならんのか……。

こうして、俺の女子高生としての生活は幕を開けるのであった。やれやれ、先が思いやられる。

第3話 野球大会

俺が女体化するという奇想天外かつ空前絶後たる体験をしてから、数日が経ったある日の部室である。

俺は椅子に座り、向かい合っている古泉と極一般的な形をした野球盤で怠惰な時間を楽しんでいた。

いくら女体化したからといって、そうそう日常ががらりと変わることもない。

変わったことといえばここんとこ毎日ハルヒが俺用のコスプレ衣装を持参してくることくらいだろうか。

本当に恥ずかしいので、そろそろやめてほしいのだがな。

とまあ、そんなことを考えているとこの状況を作り出した元凶たるあの女がいつもに増して颯爽と部室のドアを開いた。

「みんな、野球大会へ出るわよ！」

はあ？

突然のことに驚きのあまり、皆口がぽかんと開いたままになっているぞ。無論、俺も例外ではない。

「近所の掲示板に、地元の野球大会開催のチラシが貼ってあったのよ！これは、SOS団の名前を世に知らしめるチャンスだと踏んだわけっ！」

「おいおい、野球大会に出る気なのかよ。出るっただって、ここにいるのは5人だけであって人数も足りないし、そもそも野球なんてそこまですら経験がないぞ」

さらに言うと、現状SOS団のメンツは女子4人に男子1人であり、野球大会に出ると予想されるのはほとんどが丸刈り男ばかりのチームであることを考えると圧倒的不利であることこの上なしだ。

誰か止めるよ、と俺が目線でメンバーに伝えるも、古泉は「流石涼宮さんですね」などと納得しちまっているし、朝比奈さんは状況が今だ掴めずに困惑した表情を浮かべているだけだ。

ちなみに、長門は御想像の通りの反応である。

「さっそく、練習に取り掛かるわよ！」

かくして、俺たちは地元の野球大会に出場することになったわけである。やれやれ。



ハルヒが持ってきたチラシにかかれていた野球大会というのは、地元のアマチュアチームが参加する大会のようで、本格的な大学のチームも出場するようだった。

無論、俺たちも練習はしたさ。北高の野球部からグラウンドを強奪してな。

ただ、如何せんハルヒがチラシを持ってきたのはこの大会が開催される3日前であり、とても十分な練習ができていたとは思えない。

そんな状況下でとうとう野球大会開催日はやってきたのであった。

「さあ、狙うは優勝よ！」

地元の野球場に着くなり、ハルヒはずっとこの調子である。

もし、一生もできずに敗退となればどれほどの規模の閉鎖空間ができることやら。想像するだけで背筋が凍る思いである。

その脇では、人数集めの名目で緊急招集されたメンツたちが事前交流を行っている。

「おや、君がキョンくんかい！ みくるがくんづけで呼んでいたからてつきり男の子かと思っていたよっ！」

会うなり元気ハツラツの様子で挨拶してきたのは、朝比奈さんの友人である鶴屋さんだ。

ええ、本当は男なんですよ。今は性別を勝手に変えられているだけで。

そんなことを言えるわけがないので、ええそうですかなどと言葉を濁しておくことにする。

他にも同じクラスの国木田や谷口も同様に強制招集され、この場で色々と主に谷口が愚痴をこぼしているわけなのだが、ここはあえて割愛させていただきます。

「ちよつと、キョン子きなさいー！」

事前交流の場で若干気分を和ませていた俺に突如ハルヒが怒号を浴びせた。

まあ、原因はあれだろう。

「ちよつと、どういうことよ！ どうしてあんたの妹ちゃんが参加するのよっ」

「仕方がないだろ。人数が集まらなかったんだからな」

「それでも、あれはどう見ても小学生じゃない！ 小学生が入ったチームで勝利しようっての!？」

その辺ばかりはないさ。小学生だから良いのである。

ただでさえ、弱小チームなのに小学生までメンバーに入っていれば即コールド負けするのは目に見えている。

俺はさっさと負けて帰りたいのさ。

そんな俺の思惑を知らないハルヒは、暫く考え込んだ後、「まっ、あんなの妹ちゃんなら仕方ないわね。その代わり、あんたがその分まで頑張るのよ！」となんだかよく解らないうちに納得したようでこれ以上にも言ってこなかった。

ちなみに、先程ハルヒが俺のことを「キョン子」と呼んでいたが、どうやら女体化した俺の呼び名はキョンからキョン子にシフトチェンジしたようである。

こういった経緯を経て勝つこない試合は開始された。

相手は、なんと前年優勝チームであり、今年も優勝候補筆頭である大学野球チームだった。

ああ、これは確実に負けたな。

と思っていたのだが、予想外のことが起きた。

自分からピッチャーに名乗り出たハルヒの投球はストレートしかないものの、そこそ速かったのだ。

やはり、全部活動に体験入部した常軌を逸した変態っぷりは伊達じゃないということだろうか。

そして、あろうことか一人目を三振に仕留めたのである。

もしかして、僅かなりともありえるのではなからうか。

前言撤回。ダメだこりゃ。

確かに、ハルヒの速球はなかなか凄いなものであり、初めのうちはそれで良かったものの、向こうは経験も数倍上であり、すぐに順応さ

れてしまった。

また、こちらの即興チーム守備陣では本来なら打ち取れたであろう打球でも齒が立たない。

みるみるうちに点差が開いていってしまった。もうこれは、負けだな。

「これは、かなり不味い状況になりました」

そういつて半ばあきらめモードに入っていた俺に、深刻な表情をした古泉が異常なまでに顔を近づけ耳打ちしてきた。

顔が近すぎるぞ……。なんなんだこいつは。

それはさておき、なにがあつたんだ？

「閉鎖空間ですよ。現在どんどんと拡大中です。このままでは、世界が覆い尽くされてしまうのも時間の問題でしょう」

「なんだ？ たかが野球の試合ひとつで世界崩壊かよ」

「ええ、流石は涼宮さんですね。しかし、あなたもあなたですよ。4番でありながら、一本も打てていない。それに、涼宮さんが失望しているのですよ」

「あのなあ。くじで決まった4番に一体何を期待しているんだ」

「いえ、これは涼宮さんの無意識からきたものです。あなたなら、4番になっても4番らしい活躍をしてくれると期待していたのでしよう」
全く、なんてむちゃくちゃな奴だ。

しかし、俺も何もできなかったからなあ。

「それは、ごめん……」

「い、いえ！ 僕は決してあなたを責めているわけではないんです！
それに、その涙目は反則ですよ」

俺が若干責任を感じて謝罪すると、何故か古泉は焦った表情を浮かべる。

なんだか、依然と反応が全然違うもんだな。

「んで、このままだと本島に負けてしまうことになるのだろうか、策はあるのか？」

「長門さんに協力を仰ぎましょう。今回の件では利害が一致しているようなので」

その後、長門の宇宙的奇天烈パワーである「ホーミングモード」とやらのおかげで、俺たちはほとんど点を稼いでいった。

誰あろう朝比奈さんまでもがヒットを打ったのである。

このホーミングモードとやらはちとチートすぎやしないか、おい。

「その辺にしとけ」

「……解った」

俺が長門にホーミングモード解除を頼み、解除された瞬間から俺たちの打線は一気に平生の弱小打線となった。

なにはともあれ、あのチートモードのおかげであと1点のところまでなったんだ。この後は、そんな宇宙的パワーに頼るのもよくないだろう。

9回裏、俺たちの最後の攻撃である。この攻撃でもし1点も取れなければ敗北が決定する。

「ちよつと、あんたとみくるちゃん来なさいっ！」

「ふええ……」

打順ではないのでこの状況を余裕の構えで眺めていた俺の首根っこを妙にニヤニヤした表情を浮かべたハルヒが掴んできた。

おい、一体何のつもりだ。

「これよっ！ チアガールの服を着て、チームを応援するのっ！」
「ひええ」

悲鳴を上げる朝比奈さんをハルヒは強制的に脱がし始めた。

ああ、これは俺も着るしかなさそうだ。とほほ。

それにしても、チアガールの衣装はやけに肌の露出が多いせいでこっぴどかしいことこの上ない。

いや、本当に恥ずかしいぞ……。

そういつて、その場に縮こまる俺にハルヒは、「何やってんのよ！ さっさとこうやって応援なさいっ！」と俺の両腕を持ち上げて無理やり応援させた。

操り人形のような気分だぜ。

バッテリーは朝比奈さん。

服装は勿論チアガールのままであり、その姿で打席に上がるもんだから、ピッチャー並びにキャッチャーの目は先程から泳ぎっぱなしだ。

くそう、俺の朝比奈さんをじろじろみるんじゃねえ。減ったらどうする。

「つて、ああつー！」

そうやって、目が泳いでいるもんだから、あろうことかキャッチャーがボールを取りこぼしてしまった。

これは、またとないチャンスである。

しかし、朝比奈さんはその場で困惑したまま立ち尽くしている。

「みくるちゃん、何してんのよー！ はやく走るのよー！」

激怒するハルヒの命令に、朝比奈さんはようやくのことで一塁へと向かった。

危うくアウトになりそうであったが、なんとか滑り込みセーフだったようだ。

「次は、俺だぜー！ キョン子〜！ 俺が打ったら、付き合ってくれ！」
アホの谷口がそんなことを言いながら打席に入る。なんだ、あいつは気持ち悪いな。

当然のことながら、アホはアホなりに頑張ったようだが、結果は三振である。

まあ、順当な結果だ。寧ろ、打たれたら俺が困るわ。

その後も国木田のバットが空を斬り、2アウト。残すは、古泉のみとなった。

「では、参ります」

古泉は意を決して打席へと入った。

「古泉くん、ちゃっちゃとでかいのうつちやいなさ〜い！」

ハルヒが手を大きく回してホームランポーズをとる。もう、勝った気でいやがる。

いや、流石に古泉でも無理ではなからうか。

しかし、このままでは不味い。なんとしても、打ってもらわねば。

俺は、恥ずかしさを心の奥底に押し込み、意を決して声を上げる。

「古泉く！ 頑張れっ！」

すると、ちらりとこちらを垣間見た古泉が若干ニヤリと口角を上げたように見えた。

その瞬間だった。

古泉のバットから放たれた一撃は、ピッチャーそして外野陣のはるか頭上を通り越し、そして――

「ホームラン！ ホームラン！」

勢いよくスタンドへと飛び込んでいった。

◆◆

試合が終了し、そこには大満足気に白い歯をニヤリと出して仁王立ちするハルヒの姿があった。

「ここらで、伝えておくべきかね。」

「おつつかれ〜！ さっきの試合は、素晴らしい出来だったわね」

「ああ、お疲れ。その試合のことなんだがな」

「なに？ どうしたのよ、すっごい疲れたような顔をして。まるで不況で派遣切りされたサラリーマンのような格好ね」

「これだけ、劇的な大勝利をしたのだから、もう結構だろ。相手チームのメンツも予想外のことに意気消沈しちまっているし。それに、もう俺の身体はボロボロだ」

それに、古泉もこの後すぐにバイトに行かねばならんらしいな。すると、これまた予想外なことにハルヒは文句の一つも言わずに、「そう。あんたがそれでいいのなら、それでいいわ。あたしも今日は久々に運動して疲れちゃったし」

そういつて解散を告げたのだった。

ハルヒによる解散宣言後、帰宅の準備をしていた俺の背後から古泉が現れた。

「あれ？ お前、バイトに行かなければならないんじゃないんじやなかったのか？」

「ええ、それは今から行きます。その前に、あなたに伝えておきたいことがありましてね」

ん？ 一体何の用なんだ？

俺が訳が解らず、ぽかんと口をあけていると、古泉はいつもに増して笑顔を浮かべた。

「あなたの応援があつたから、あのホームランを打てたんです。本当に、ありがとうございます」

「いやいや、俺の応援なんてなくなってお前はホームランを打っていただろうさ」

「いえ、そんなことはありませんよ。本当に感謝していますよ。おっと、機関の迎えがやってきたようです。それでは」

それだけ言うと、古泉は少しばかり頭を下げた後、去っていった。まった。

全く、律儀な野郎だぜ。

こうして、ハルヒによる無茶難題をなんとかクリアした俺たちだけだったわけだが、その様子を遠くから見つめる視線があつた。

「むうう……」

この出来事により、明くる日突如としてある事象が巻き起こつたのである。